

## 令和2年度「伊達小学校 教育のまとめ」発刊にあたって

伊達市立伊達小学校長 吉川 修一

令和2年の年明けとともに、日本でも新型コロナウイルスの感染が始まり、2月末から3月にかけて、学校は臨時休校。学校再開後、卒業式は分散で実施。修了式や離任式においても、例年と異なるかたちとなり、何か落ち着きがない状態で年度末を迎え、「この先どうなるのだろう」という不安な気持ちの中、令和2年度は始まりました。

予想的中し、新学期は、放送での始業式に、分散での入学式。それでも何とか始まった令和2年度だったのですが、二週間後には再び臨時休校となり、一か月間の休校後、二週間の分散登校を経て、ようやく学校が本格的に始まりだしたのは6月でした。

誰もが経験したことないような状態で始まった一学期。当然この状態では運動会の開催は難しく、体育や音楽などの芸能教科は様々な規制があるために後回し、学習の遅れと時数確保に追われ、例年より二週間遅れの8月7日まで一学期は続きました。小学校では、今年度より新学習指導要領が本格的に実施されることになっていましたが、『「主体的・対話で深い学び」の視点からの授業改善』には、当然距離が生じていたように思います。

このような状況の中、本校にとって大きな影響を与えたのが、道教委の「オンライン学習導入モデル事業」でした。今年度赴任する前、3月の中学校の卒業式で、オンライン卒業式を実施した経験から、本校に赴任した当時から、市教委にオンラインの活用を要望していたところ、道教委のこの事業に推薦していただき、取り組むことになりました。

通信機器を貸与いただくこととなり、最初に取り組んだことは、オンライン参観日でした。密を避けることから参観日ができない本校にとっては、YouTube上に子供たちの様子を動画で掲載することが、唯一保護者の方々に子供たちの様子を見ていただける手段で、動画を掲載するたびに、各家庭で複数回見ていただいたようで、子供と一緒に見ている保護者の方も多く、これを機に学校の様子が大きく変わったように思います。「子供たちにとっては、親が見てくれている。親にとっては、子供の様子が見ることができる。」というのは、教育の活動には大きな影響があるということを改めて感じさせてもらいました。

6年生のオンライン授業の取組は、多くの方々のご存じの通り、各種報道に取り上げられ、胆振管内はもとより、全道でも最先端の取組として評価をいただきました。しかし、本校では、その取組が特別支援学級担当教諭団により、対象児童にも展開されていましたし、感染症対応のために登校できない児童や不登校児童、通級指導教室の児童にも活用され、多くの先生方がかかわり、学校として実践でき、一定の成果を上げ、関係する保護者の方々に喜んでいただいたことを誇りに思っています。

二学期、数多くの学校で予定されていた研究大会が中止される中、本校では、11月に研究大会を開催しましたが、開催にこぎつけたのは、「学校力の指定を受け、培ってきた本校職員の意識の高さ」と、「オンラインの指定を受け、コロナ禍でのオンライン授業の重要性、必要性の本校職員の実感」からだと思えます。手前味噌になりますが、改めて本校職員の熱意とセンスの高さを感じます。

新年度開始当時は、どんな1年になるのだろうと不安が大きかったのですが、振り返ってみると、本校にとっては実りの多かった1年になったように思います。「学力や体力の向上」については、数値的な部分においては、例年より若干物足りない部分もあり、次年度以降の課題となりますが、全道最先端と評価されたオンラインの取組を新しい伊達小の伝統の1ページとし、今後とも保護者や地域の皆様方、教育委員会の期待に添うよう、子供たちのために本校教育の一層の充実を目指してまいります。

今後とも、本校教育へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。